

第102回東京箱根間往復大学駅伝競走(通称：箱根駅伝) 出場

のぐち
野口そうた
颯汰 さん

立教大学 3年

新春を彩る日本最大級の学生駅伝にて、第102回大会、6区で箱根の山を力走し、^{たすき}襷をつなげた野口選手。1月上旬、大会後のダメージが残るなか、インタビューにご快諾いただきました。

幼少期から憧れた箱根の舞台

厳しい道のりを、1つ1つ乗り越えて

陸上競技を始めたのは、6歳のころ。母の知り合いが陸上チーム「^{ファイブ}Five」でコーチをしていたことがきっかけでした。練習を重ねるうちに、短距離よりも長距離が向いていることに気付き、本格的に長距離への道を歩み始めました。

最初の転機となったのは中学3年のころです。それまでは県大会予選にとどまっていたのが、3年生になって、全国大会に出場することができました。そこで、もっと上を目指したいと思い、東庄を離れて福島県の陸上強豪校に進学し、寮生活がスタートしました。高校では、伸び悩むことも多々ありましたが、3年生でようやく大舞台である全国高校駅伝に出場することができました。

立教大学に入学後は、厳しい練習をこなす日々の中で、タイムは悪くなる一方。新たな環境で、結果が出せないことに焦りや悔しさを抱えることも多かったですが、

強みの「下り」を武器に

身を削って走り抜いた6区

「山上りの5区」から襷を受け取る6区。下りがメインのコースでありながら、最初の4kmは上りが続くうえ、早朝の冷え込む箱根の山に挑む厳しい区間です。足への負担が大きく、ダメージは計り知れません。

当日は一斉スタートでしたが、前との差を開けることなく、7区の走者に襷を繋ぐことができ、強みとする「下り」で自分の力を発揮できたかなと思います。ただ、「上り」はあまり得意ではないので、序盤4kmはとてもつらかったです。過去の走り、大会を思い出し、ペース配分などの計算をしながら走りしました。

1年、2年で振るわなかった日々を打破したいと、1日30km以上のランニングを計画しました。毎日コツコツ積み重ねた結果、だんだんと調子も上がってきました。しかし、昨年の全日本大学駅伝では、ケガもあり納得いく結果を出せずに、悔しい思いをしました。自分に足りないものを考えながらトレーニング計画を練り直している時、部内で実施したタイムトライアルで、山間部の走りを見た高林監督に、下りがメインの6区で、走者に選んでいただきました。

当日までの練習で心がけたことは「いつも通り、やりすぎない」。予選会での好タイムを振り返り、同じ練習メニューで挑みました。箱根の舞台では緊張せず、うまく走ることができたのも、自分なりに信念を持ち、練習を積み重ねて築いた成功体験があったからこそだと実感しています。

たくさんの方の応援を糧に、これからも――

箱根駅伝では、監督の応援はもとより、沿道のたくさんの方の応援が力になり、20.8kmを全力で走り抜くことができました。東庄出身の飯田貴之選手に憧れ、無我夢中で陸上にささげた15年。共に高め合った仲間や、いつも夢を応援し、好きな陸上を続けられるようサポートしてくれた家族には感謝の気持ちでいっぱい。大学生活も残り1年。学業と両立しながら、結果で恩返しできるよう励んでいきたいと思っています。

最終学年としてチームの意識を高め、箱根のシード権を獲得すること、個人としてはハーフマラソンで63分を切ることを目標として掲げ、頑張っています。引き続き応援よろしくお願いします。



克己心

野口 颯汰



トレーニング風景

野口 颯汰

立教大学経営学部3年



2004年生まれ。地区：竜神台
笹川小学校、東庄中学校を卒業後、陸上競技の強豪校である学法石川高校に進学。現在は立教大学にて、文武両道の大学生活を送っている。帰省時に必ず食べる母の手料理はハヤシライス。部の同期で旅行や食事に行くことが息抜きになっている。



箱根駅伝での激走



予選会での、本選出場決定の瞬間



襷を6区から7区へ